

会報五月号 切腹と介錯と生命燃焼(その二)

目次

- ・ 覚悟が決められない
- ・ 切腹の作法(型)
- ・ 切腹の一般的な手順
- ・ あなたの切腹物語
- ・ 自身の「在り方」の変化

● 覚悟が決められない

前回までの未来への自己戦略について。時間は待つてはくれないのだから「覚悟」を決めて生きなくてはならないとつくづく思うのだが、普段ポーンと生きながら釈迦に説法しているような私では、「覚悟」を決めることなどできない。覚悟を決めた境地などは、きつと私の想像を絶するだろうから全く分からないのだ。一体どういう道筋をつけなければならないだろう。

しかし葉隠も、「武士道とは死ぬことと見つけたり」「男は命を惜しまぬに極まりたり」「必死の観念、一日仕切りなるべし」「毎朝毎夕、改めては死に改めては死ぬ」と説き、「覚悟」を決めて生きろと私に迫ってくる。

そこで、覚悟という心情を常として生きる為、今回から数回に分けて、切腹という儀式を介して「覚悟」の会得を試みてみたい。これは、自分の命を燃焼させ尽くすという約束を、覚悟を以て自らの命と交わすことである。

今回は、「切腹物語」として、切腹者の心情を体験してもらい、来月は介錯者の心情を感じてもらおう。恐らく、明日からの生き方、心の持ち方が一変する程のインパクト：・を受け取ってもらえたら嬉しい。様々なことへの不安や恐怖など消し飛んでしまおうだろう。自らの心の静謐さと熱意を感じるようになるだろう。死への「覚悟」を決めて「生きる」と決意するとはどういうことか、改めて実感できるようになるだろう。後は、あらゆる喜怒哀楽・艱難辛苦・利害得失・栄枯盛衰の経験を積極的に嘗め尽くしながら、己の信念や愛、志の具現化に向けて邁進するだけだ。

● 切腹の作法(型)

切腹とは、日本の武士道における儀式の一つであり、腹部を切ることで自身の責任

や名誉を示す行為である。それは自死であって自殺とは全く違う。自死とは、己の命よりも大切な何ものかを守る為に自らの命を断ち切ることであり、自殺は、生を拒否したり、生からの逃避や解放の為に自らの命を断ち切ることである。

切腹には厳格な作法（型）がある。作法通りに行く利点は、自分の感情や欲求が表に出てくる前に、純粹に目的を完遂することができるといふ点にある。それは、私利私欲を超えた行動を実現する力である。型や作法には、人間の弱さや過ちを最小限にする仕組みが織り込まれているのである。例えば、会津藩の藩士の子どもたちは（六歳くらいから）、寺子屋から自宅に戻ると、まず仏間へ入って切腹の作法を練習する。自らの死に方の作法を教わってから人生を始めるのである。

ということ、まずは切腹の作法（型）の流れから、切腹のイメージを共有したい。その後「切腹物語」として、あなたに切腹してもらおう。

●切腹の一般的な手順

- 一、切腹の通達↓切腹の命令が下されると、対象者にその旨が伝えられる。
- 二、身支度↓切腹を行う者は、まず沐浴を行い身を清める。その後、白無地の小袖と浅葱色の袴を左前で着用し、髪は普段より高く結い、通常とは逆に曲げる。
- 三、切腹の場の準備↓屋内の場合、畳を裏返して布団を敷き、背後に屏風を逆さに立てる。切腹の前には三宝が置かれ、その上に短刀が奉書紙で包まれて用意される。
- 四、立会人の配置↓切腹には、介錯人（切腹後に首を落とす役）と検視役（切腹の遂行を確認する役）が立ち会う。
- 五、辞世の句↓切腹人は座につき、辞世の句を詠む。これは事前に考えておくのが

礼儀。

六、最期の食事と酒↓切腹人の前には、湯漬けや香の物、塩、味噌の肴、逆さ箸が供され、銚子で酒が注がれる。酒は左手で二度注がれ、二杯を四度で飲むのが作法。

七、脱衣と準備↓切腹人は袴をはね上げ、腹部を露出させる。三宝を引き寄せ、短刀を手に取り、三宝を後方に置く。この際、短刀は奉書紙で包まれ、刃先が少し出るように準備されている。

八、切腹と介錯↓切腹人は短刀を左腹部に突き立て、右へ引き回す。この動作に合わせて、介錯人が首を皮一枚残して斬る。これを「抱き首」といい、介錯人の礼儀とされた。ここはもう少し詳しく述べておく。

①腹を切る位置↓腹の左脇腹（左側腹部。おおよそ臍の高さ）から右脇腹にかけて切る。これは、腹部を「魂の座」とみなす日本の伝統的な思想に基づく。

②方法↓刀または短刀（脇差）を用いて、左側から右側へ一文字に切ることが基本である。模倣してみてもいい。また、必要に応じて、さらに縦に切る（「十文字切り」）こともあるが、これは非常に困難かつ苦痛が伴うため、稀とされている。

③介錯↓切腹する者が苦痛で長時間苦しむのを避けるために、介錯人が後ろに控え、腹を切った直後に首を落とすことで、死を早める役割を果たす。

切腹の作法の流れを想像してもらえただろうか。切腹の儀式は厳格で、刀の扱いや動作、準備に至るまで細かい礼法が存在する。また、当然ながら、腹を切る行為は非常に痛みを伴い、切腹する者の覚悟や精神力が、つまり彼の全人格が試される。

切腹後や介錯後の手順についても共有しておこう。

一、介錯の確認↓切腹を行った後、介錯人が首を切り落とすが、完全に切り離すことは避けられた（首の皮一枚を残す）。これにより、首が完全に地面に転がることを防いだ（尊厳を保つ）。

二、遺体の整え↓介錯が終わると、切腹した者の体を横たえて、遺体の姿勢と衣服を整えて見苦しくないようにする。流血や汚れた場を迅速に清掃する。

三、遺体の処理↓遺体は遺族や指定された者によって回収される。遺体は清められた後、埋葬の準備が行われる。

四、切腹場の清掃↓血液や汚れた道具などを速やかに清掃する。切腹が行われた場が神聖視される場合、塩などで清めを行う。

五、記録や報告↓切腹が正式な儀式として行われた場合、その内容が記録され、主君や関係者に報告される。

六、弔いと儀式↓遺族や関係者は弔いを行う。切腹が名誉を伴うものであれば、その者の名誉を称える場が設けられる場合もある。

以上である。切腹は、単なる死の手段ではなく、武士の名誉や家族のために行われる行為のため、切腹後の手順も厳粛かつ慎重に進められた。

さて、次はいよいよあなたの番だ。ゆっくり実感を伴いながら「切腹物語」を読み進めてもらいたい。

●あなたの切腹物語

あなたは正座し、目の前の白布をじっと見つめている。

役人のひとりが三宝を両手で捧げながら近付いてくる。その上に和紙に巻かれた九寸五分（約三〇センチ）の脇差がのっている。役人はこの脇差を、額つきながらあなたに差し出す。あなたはこれをうやうやしく受け取り、両手で頭の高さまで捧げながら、自分の前に置いた。

周囲に立会人が数名座っている。介錯人は左側にしゃがんで待機している。彼はあなたの親友だ。彼は今何を感じているだろう。

あなたは一礼して着物をはだけ、上半身をあらわにする。後ろにひっくり返らないように、作法通り袖を膝の下に押し込む。

「この刃で、己を断つ。」あなたは脇差の柄をゆっくり掴む。だが、その冷たい感触に触れた瞬間、全身に鳥肌が立つ。

死を選ぶというこの現実を、自分の肉体が拒絶する。

膝が震え、息が乱れる。自分の命を自分の手で絶つ、その行為がこんなにも恐ろしいとは――。

胸は激しく高鳴り、耳には自分の心音しか聞こえない。

呼吸を整えようとするが、喉が引き攣ってうまく空気を吸えない。

「逃げてはならない……」自分にそう言い聞かせる。

心の奥底から湧き上がる恐怖と覚悟との葛藤があなたの全身を硬直させる。逃げたい――いや、今すぐ立ち上がって叫び出したい。だが、その感情を押し込めるように、あなたは歯を食いしばり、目を閉じた。

この静寂は、あなたの覚悟を試す無言の刃だ。

冷たい汗が額から流れ、頬を伝って地面に落ちる。

「恐れるな……恐れるな……覚悟を決めろ」

しかし、手の震えは止まらず、心臓は今にも破裂しそうなほど鼓動を打ち続ける。腹の中がひっくり返りそうさ。

覚悟を決めたはずの心に、僅かな迷いが忍び寄る。

しかし、その迷いに気付いた瞬間、あなたは牙を剥いた獣のような顔をした。

「迷いは恥だ。俺は武士だ」

あなたは冷たい刃先を左腹部に当てる。

刃先に、押し返すような肉の感触がある。それはまるで、肉体が「やめろ」と懇願しているようだ。

「ここで退けば全てが無になる」

内なる声が何度も響く。

背筋にぞわりと悪寒が走り、汗が頬を伝い落ちるのがわかる。

「覚悟を決めろ。」そう自分に言い聞かせたあなたは、左腹に刃を押し込んでいく。鋭い刃が皮膚を裂く感覚が鮮明に伝わってくる。

意志とは裏腹に、身体が本能的に抵抗する。

腹筋が刃を押し返すかのように硬く締まり、刃が進まない。

右手に力を込め、左手で刃の背を押しして腹筋の抵抗を押し破る。

刃先が肉に深々と沈み込んでいく。

刃が内臓に達し、柔らかい組織を裂き進む感触が伝わってくる。

最初は冷たい痛み――だが刃が肉を割り進むにつれて、それは熱を伴う激痛に変わる。まるで腹の奥から炎が湧き上がり、内臓を焼き尽くすかのようなのだ。

身体が硬直し、喉から押し殺した呻き声が漏れる。

激痛が閃光のように全身を貫き、目の前が白くなって思わず息が止まる。

「くっ……！」

灼熱の痛みが腹から全身に広がり、喉から何かを叫ぼうとするが、声が出ない。痛みの波が襲い、意識が遠のきそうになる。

「まだだ……進め……！」

刃を右に引こうとした瞬間、腹筋が硬直し、内臓が短刀を押し返してくる。

「邪魔をするな……！」

自分自身と闘いながら、ゆっくりと刃を右へ引いていく。

「まだ終わらない……まだだ……」声にならない声が喉を震わせる。

奥歯を噛み締め、さらに両腕に力を込める。

内臓が刃に触れる感覚が生々しく伝わるたびに、意識が遠ざかりそうになる。

鮮血が腹から溢れ出し、畳を濡らす。

刃が腸を押しつけて進む。

次の瞬間、刃先が背骨に触れて、ガキッと鈍い音を立てる。

激痛が続く。冷たい汗が滝のように流れる。

目の前が霞み、耳鳴りが鳴り響く。

「ここで醜態をさらせば、全てが無駄になる……！」

自らの生き様をかけた意志が恐怖を抑え込む。

自分の命が流れ出ていくのがわかる。

熱いものが腹部を伝い、冷えた空気に晒される。

全身が痺れるように痛み、手足が冷たくなっていく。

目の前の景色が滲み、自分の中で何かが決壊する。

恐怖と勇気の交錯、悔恨と諦観、名誉の重圧、感謝と別れ、孤独と解放、覚悟と静寂、未来への祈り——すべてが混ざり合い、胸の奥底から静けさが広がった。

その時、脇に待機してあなたの所作の一つ一つを見つめていた介錯人がさっと立ち上がり、刀を空中に一瞬静止させる。

次の瞬間、刀が一閃する。風を切る鋭い音と共に振り下ろされた。

あなたの視界が一瞬、強烈な光で満たされる——そして無。

あなたの首は体から離れ、ただ静寂だけが残った。

●自身の「在り方」の変化

葉隠は「必死の観念、一日仕切りなるべし」「毎朝毎夕、改めては死に改めては死ぬ」と説く。

切腹とは、痛いとか怖いとかいった温いものではない。自分の人格のすべて、そして人生のすべてをこの一瞬に凝縮させる厳粛な儀式である。この切腹物語であなたも

死んだ。一度死んだのである。従って、今後経験する恐怖や不安などは、死に身のあなたにとっては、もはや問題ではない。あなたを邪魔するものは何も無い。臆病や怠惰や傲慢、虚栄や承認欲求などどうでもよい。重要なのは、己の信念・愛・志の断行である。この切腹物語が、自身の「在り方」、そして生命燃焼に力を加える契機の一つになればと思う。

孤独と解放	名誉の重圧	悔恨と諦観
感謝と別れ	切腹時の心情	未来への祈り
恐怖と勇気の交錯	覚悟と静寂	自己超越の意志 無常観と超然

次回の会報では、あなたは介錯人になる。

それでは、今月も健康と健闘を。